

# 浦河べてるの家の当事者研究の ナレッジ・マネジメント理論からの分析

いとうたけひこ(和光大学)

ラウンドテーブル: べてる式当事者研究の研究

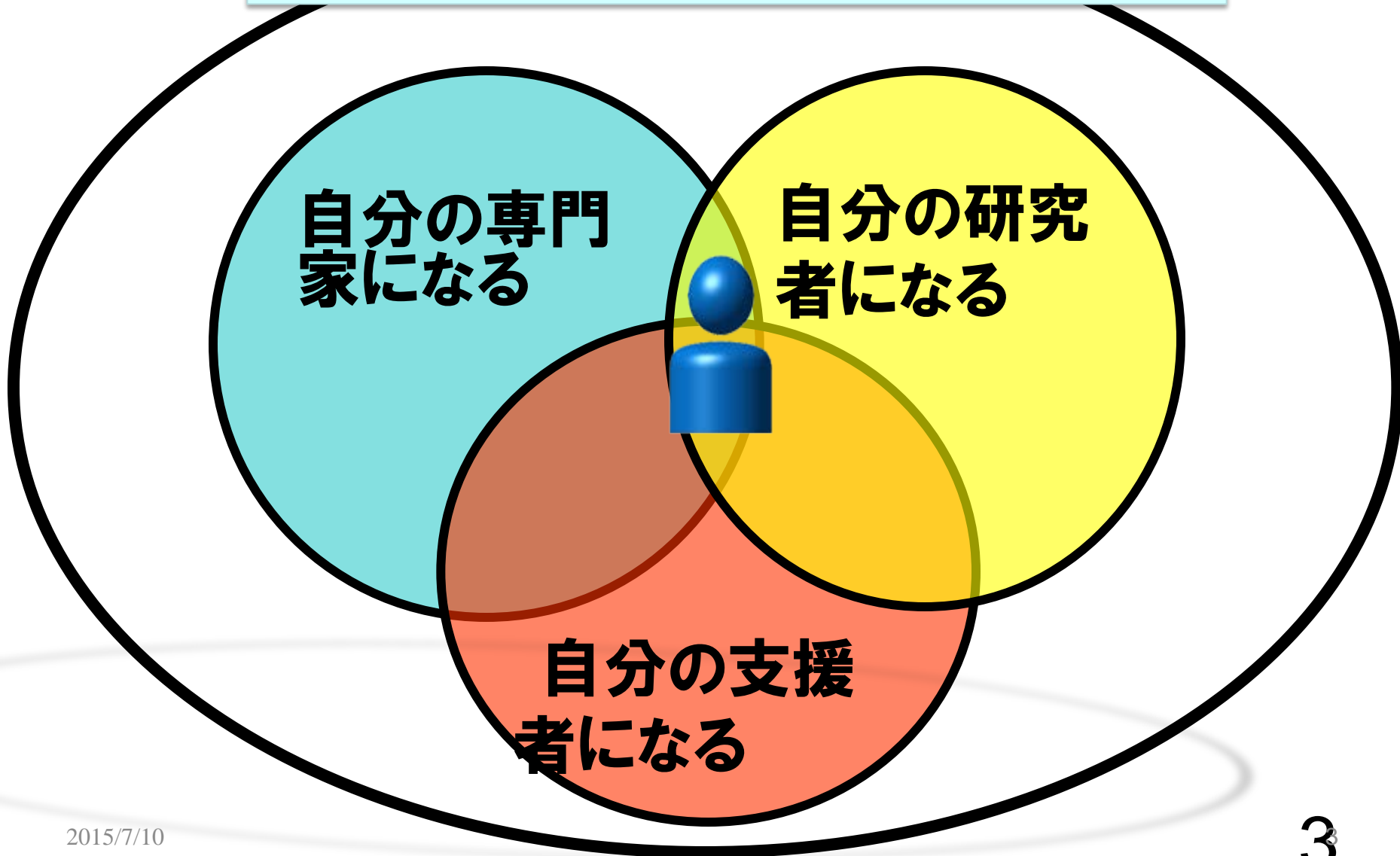
日本教育心理学会第53回総会  
北海道立道民活動センター かでの2・7  
2011年7月24日19:00～21:00 730研修室

# 当事者研究の定義

- 【用語の定義】何が当事者研究で何が当事者研究でないか？
- 「精神障害者同士が自分の助け方について一緒に研究すること」(べてるしあわせ研究所・向谷地生良, 2009)

# 当事者研究の構成

「自分の苦勞」の主人公になる



NHK教育2009年11月5日放映「統合失調症からの回復」  
向谷地宣明さんによる当事者研究

## 「どうですか？研究は？」

*本人の語りを尊重し対話する姿勢*

- 「回復って何？どうなったら回復なの？」
- 「今日の死にたいはどういう死にたいなの？」
- 「いい行き詰まり方だね」
- 「(自己病名を)自分のコントロール障害にしたの？今まで自殺願望だったよね」

**まさに「当事者が主人公の時代」**

# 当事者研究のコツ

- 自分の経験を語る、提案する、他の仲間の先行研究の紹介する、を中心に仲間の研究を応援し、励ます気持で参加する。
- 「人」と「問題(出来事)」を分ける： 問題の指摘、注意、指導、非難はしない。
- 基本は、質問、良いところ、ユニークなところ、さらに良くする点で自由に議論する。
- 研究内容や研究成果は基本的に共有を原則にするが、活用したり、第三者に提供するときには、本人の了解を得る。
- ★1人、2人でする当事者研究もある

# 当事者研究で得られる知識とは？

- 知識(knowledge)とは何か？

## 【用語の定義】

野中・遠山(2006)より

- 1 全人性
  - 2 文脈依存性
  - 3 多視点性
  - 4 可謬性
- 暗黙知と形式知(マイケル・ポラニー)
  - 理論知と経験知 (看護の知識創造理論＝中山モデル)

# 表1 暗黙知と形式知の比較

(野中・紺野を一部改変)

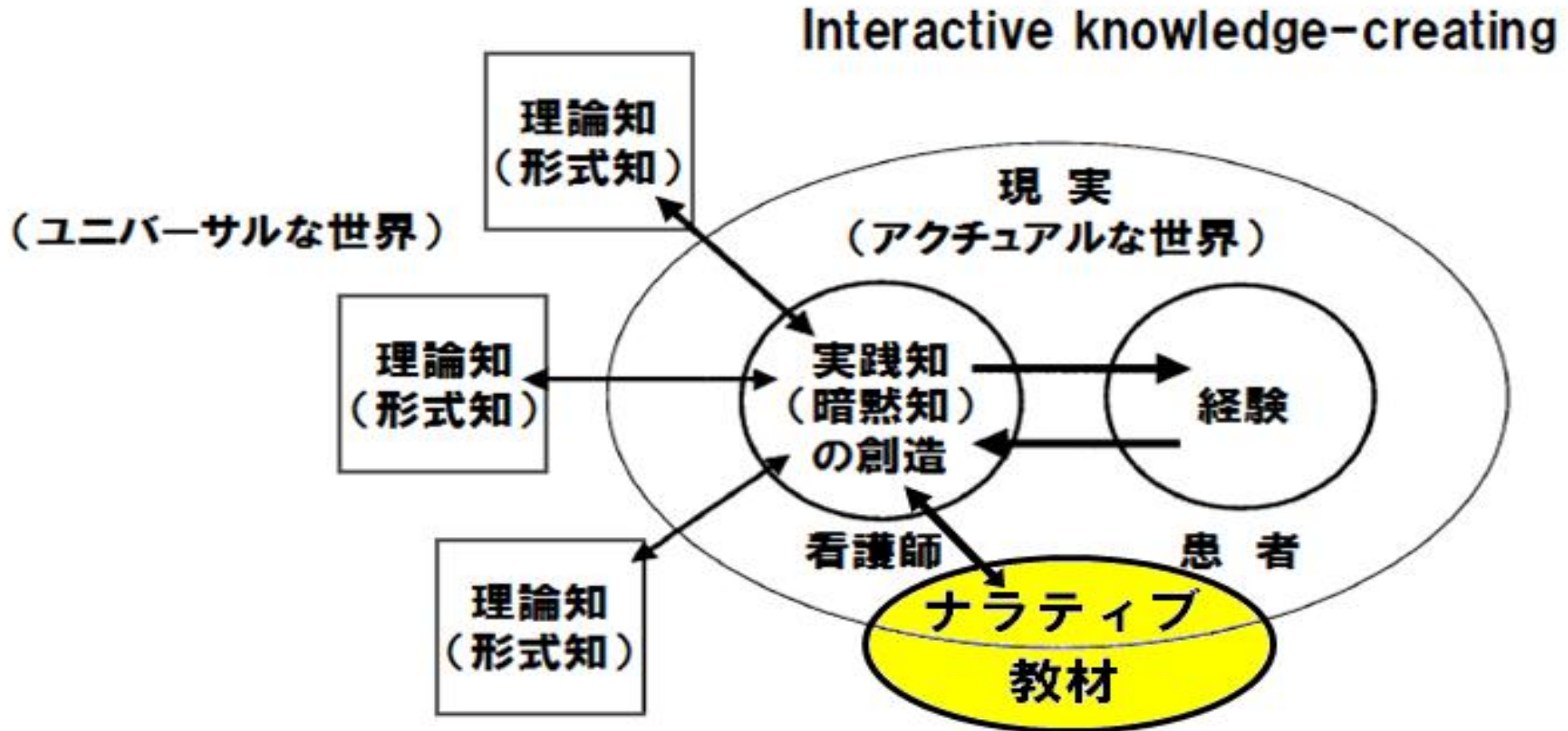
## 暗黙知tacit knowledge

- 言語化しえない・言語化しがたい知識
- 経験や五感から得られる直接的知識
- 現時点(今、ここ)の知識
- 身体的な勘どころ、コツと結びついた知識
- 主観的・個人的
- 情緒的・情念的
- アナログ知、現場の知
- 特定の人間、場所、対象に特定・限定されることが多い
- 身体経験をともなう共同作業により共有、発展増殖が可能

## 形式知explicit knowledge

- 言語化された明示的な知識
- 暗黙知(区切られた)から分節される体系的知識
- 過去の(区切られ整理された)知識
- 明示的な方法・手順、事物についての情報を理解するための辞書的構造
- 客観的・社会(組織)的
- 理性的・論理的
- デジタル知、コードの知
- 情報システムによる補完などにより時空を超えた移転、再利用が可能
- 言語的媒介をつうじて共有、編集が可能

図1 暗黙知と形式知と看護理論：看護師の知識創造モデルにおけるナラティブ教材の位置づけ(中山モデルに加筆)



- 小平朋江・いとうたけひこ・大高庸平 2010 統合失調症の闘病記の分析：古川奈都子『心を病むってどういうこと？：精神病の体験者より』の構造のテキストマイニング 日本精神保健看護学会誌, 19(2), 10-21.





# 当事者研究における

## 形式知と暗黙知のサイクルによる知の創造

形式知・理論知（「くどうくどき」「なつひさお」「たなかやすお」）

問題の所在＝「くどうくどき」

問題の原因・背景＝「なつひさお」

問題解決法＝「たなかやすお」

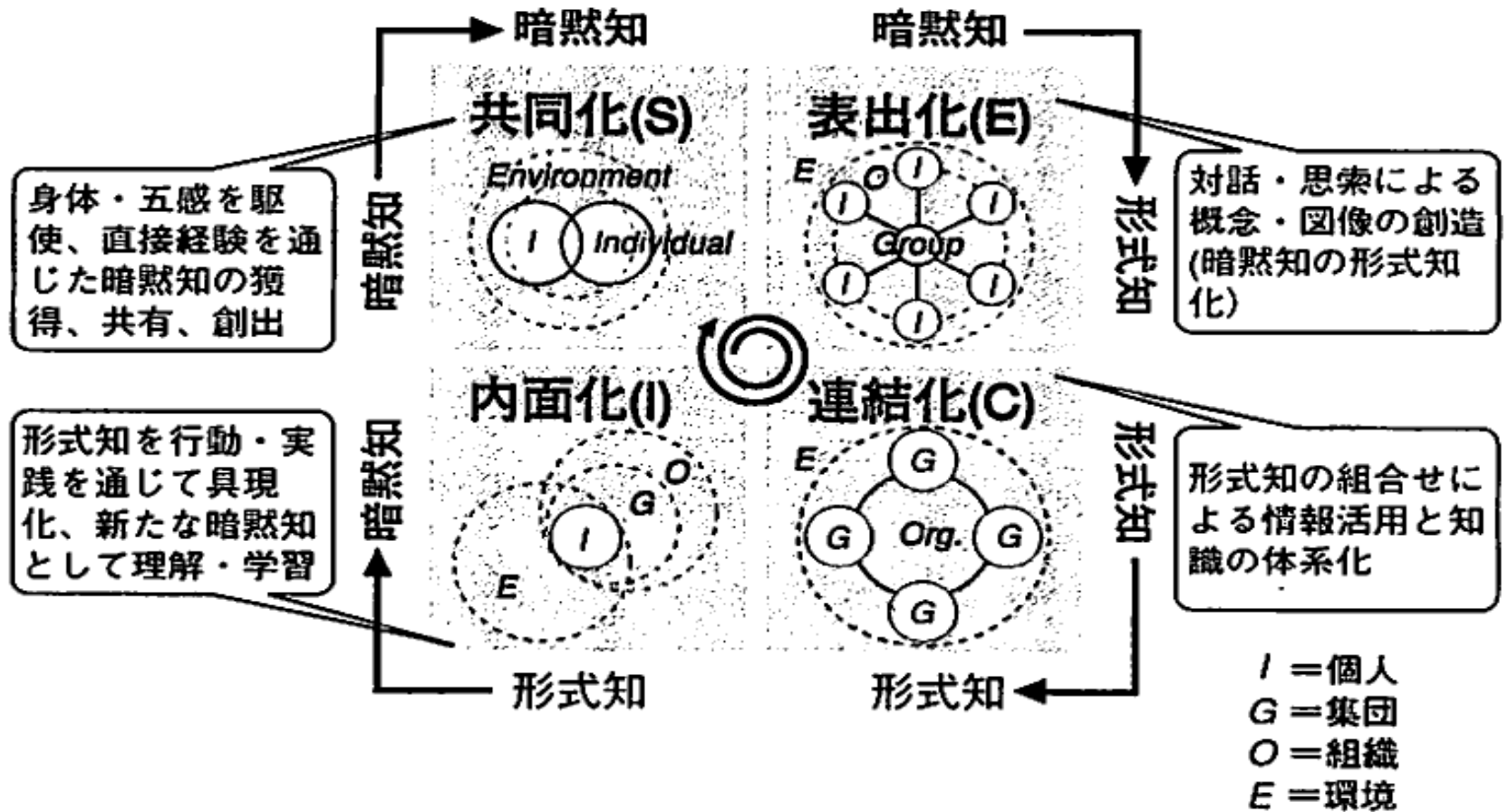
↓ ↑

暗黙知・実践知としての実際的対処法の研究

- 企業活動における知識創造と同じ構造である！

# 図2 SECI(セキ)モデル: 組織的知識創造モデル

自己と他者/環境との相互作用を通じた自己実現プロセス



- 國領二郎・野中郁次郎・片岡雅憲 (2003) 『ネットワーク社会の知識経営』 NTT出版

## 表2 当事者研究の理念（べてるしあわせ研究所・向谷地（2009）より作成）

- 1 自分自身で、ともに！
- 2 「自己病名」を決めよう！
- 3 「弱さ」は力
- 4 経験は「宝」
- 5 「苦勞の棚上げ」をする
- 6 「見つめる」から「眺める」へ
- 7 「考える」ことの回復
- 8 「人」と「問題」を分けて考える
- 9 主観・反転・“非”常識
- 10 生活の場は大切な「実験室」
- 11 いつでも、どこでも、いつまでも
- 12 にもかかわらず笑うこと  
（ユーモア）
- 13 「言葉」を変える
- 14 「行い」を変える
- 15 病氣も回復を求めている
- 16 当事者研究は頭でしない、足でする
- 17 これからも新しい理念が付け加わる

# 目的

- 本研究の目的は、浦河べてるの家当事者研究の知識創造の過程が
- 企業活動の分析をとおして生成された組織的知識創造モデルである
- SECI(セキ)モデルと同一の構造を持つかどうかを
- 当事者研究の理念の分析を通して
- 明らかにすることである。

# 方法

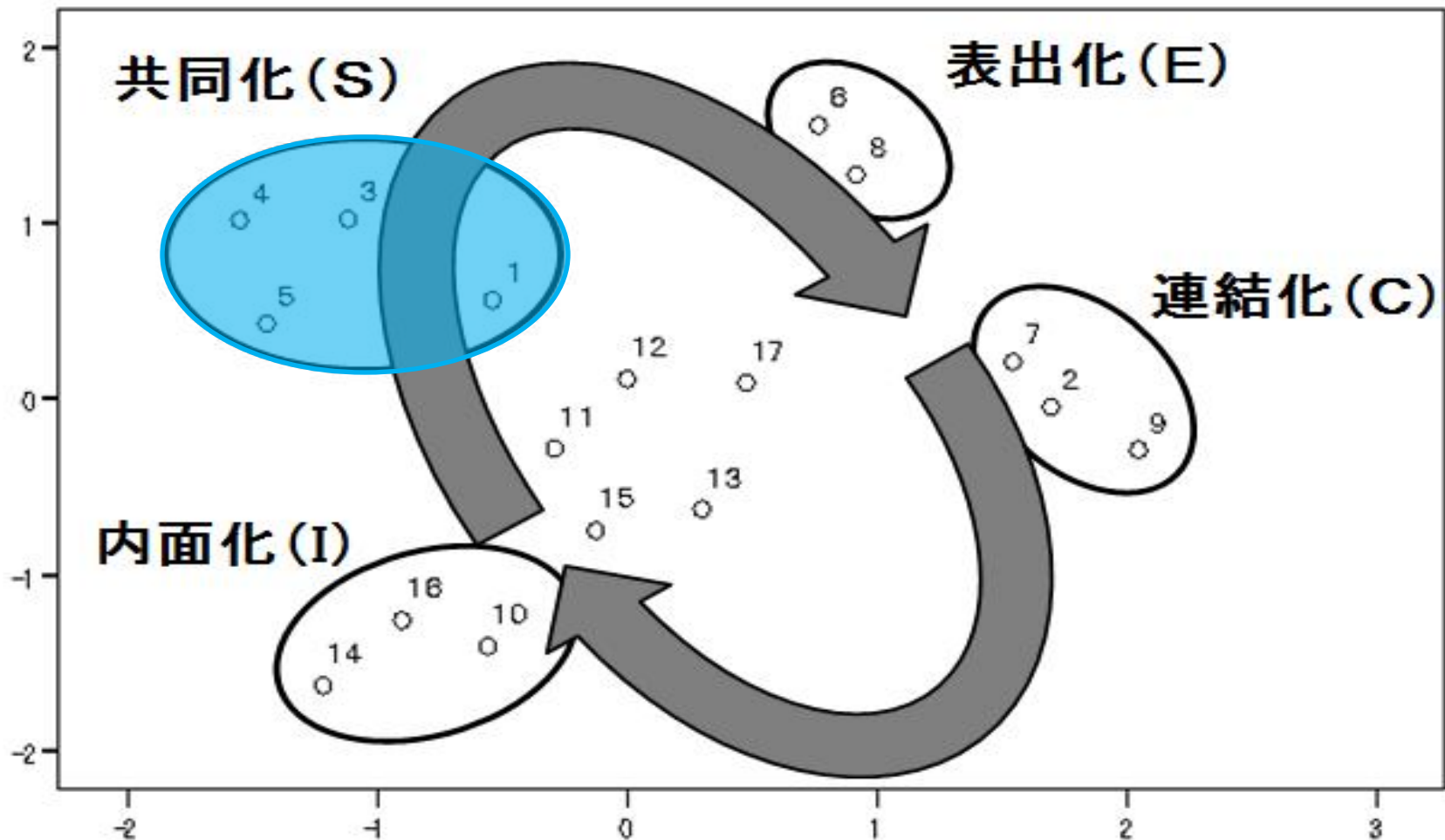
- 分析対象：当事者研究の17項目の理念（『レッツ！ 当事者研究1』の第二章）
- 手続き：表2の17項目がSECIモデルの4要素にどれだけ合致するかを評定した。
- 評定値から距離行列を作製して、多次元尺度法（MDS）による布置をおこなった。
- 布置図により、4要素（モード）と17理念の関わりを分析した。

## 表2 当事者研究の理念（べてるしあわせ研究所・向谷地（2009）より作成）

- 1 自分自身で、ともに！
- 2 「自己病名」を決めよう！
- 3 「弱さ」は力
- 4 経験は「宝」
- 5 「苦勞の棚上げ」をする
- 6 「見つめる」から「眺める」へ
- 7 「考える」ことの回復
- 8 「人」と「問題」を分けて考える
- 9 主観・反転・“非”常識
- 10 生活の場は大切な「実験室」
- 11 いつでも、どこでも、いつまでも
- 12 にもかかわらず笑うこと  
（ユーモア）
- 13 「言葉」を変える
- 14 「行い」を変える
- 15 病氣も回復を求めている
- 16 当事者研究は頭でしない、足です
- 17 これからも新しい理念が付け加わる

# 図3 多次元尺度法(MDS)による当事者研究の理念の 布置図

(数字は表2の当事者研究の理念の番号を表す)





# (1)「共同化」 Synchronization

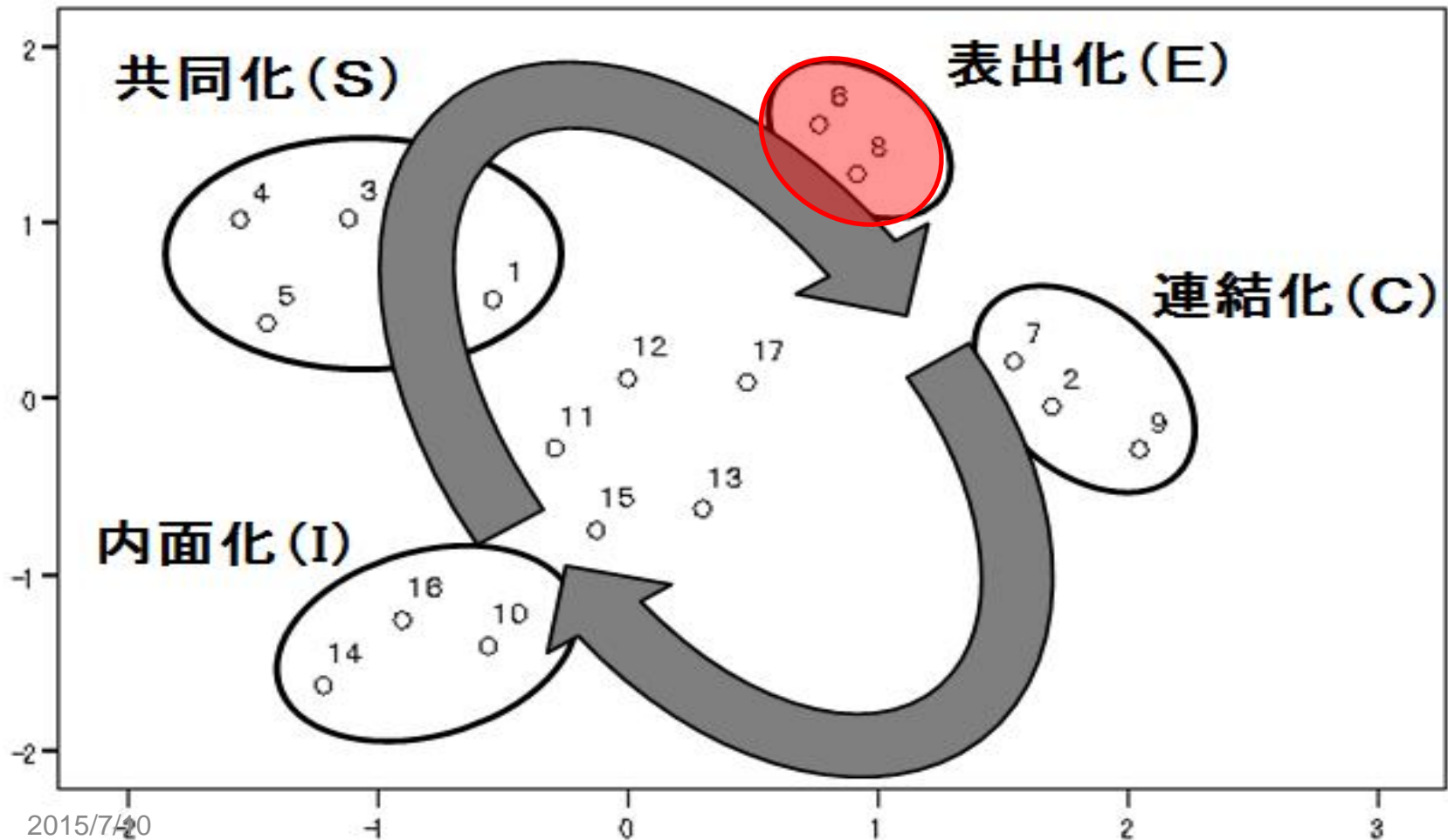
## 暗黙知の共有

- 1 自分自身で、ともに！
- 2 「自己病名」を決めよう！
- 3 「弱さ」は力
- 4 経験は「宝」
- 5 「苦労の棚上げ」をする

苦労を共有・共感する

# 図3 多次元尺度法(MDS)による当事者研究の理念の 布置図

(数字は表2の当事者研究の理念の番号を表す)



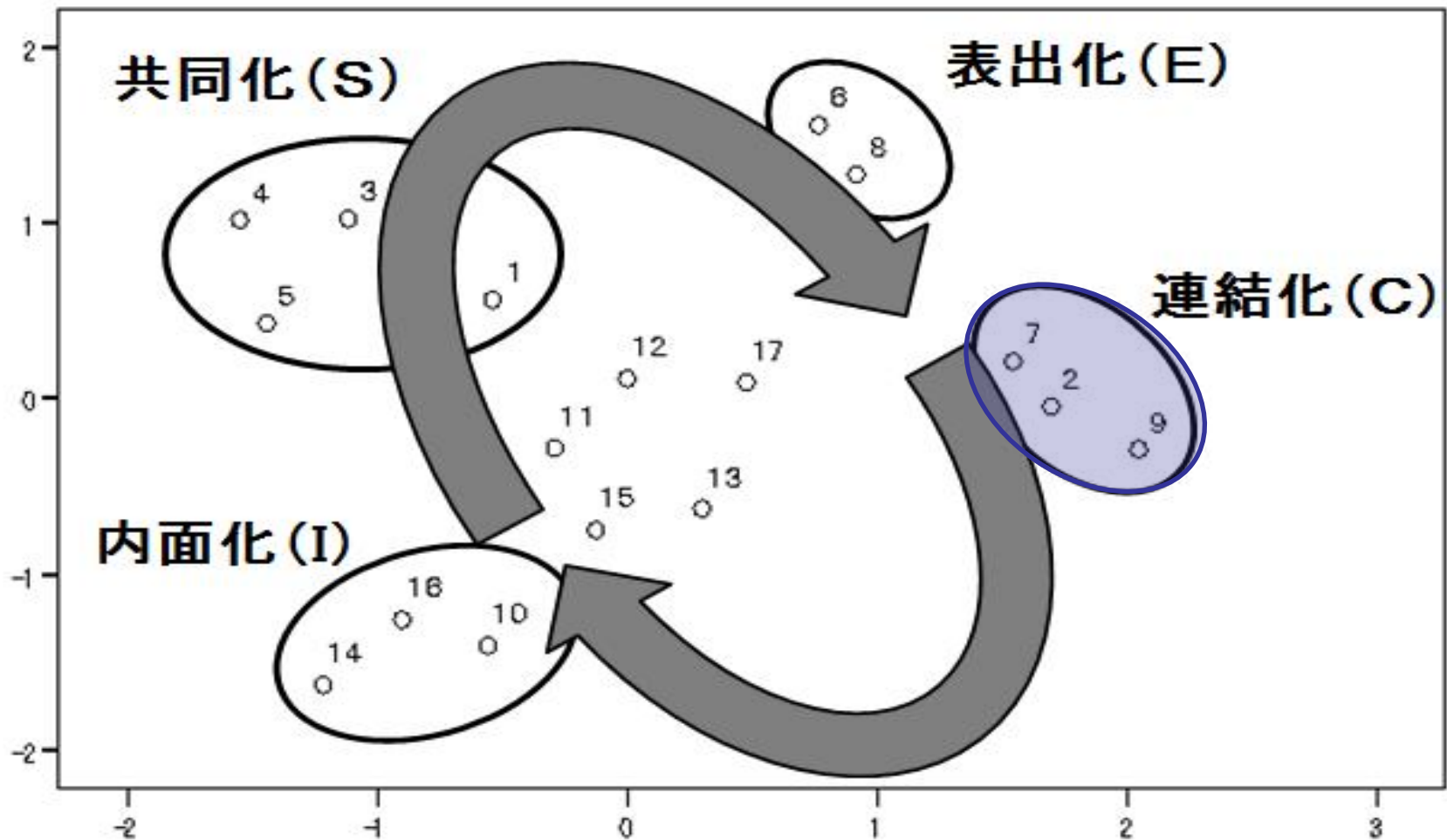
## (2)「表出化」Externalization 暗黙知から形式知へ

- 6 「見つめる」から「眺める」へ
- 8 「人」と「問題」を分けて考える

ホワイトボードの活用:

グラフ、イラスト、図示  
もやもやを言葉にする

図3 多次元尺度法(MDS)による当事者研究の理念  
(数字は表2の当事者研究の理念の番号を表す)



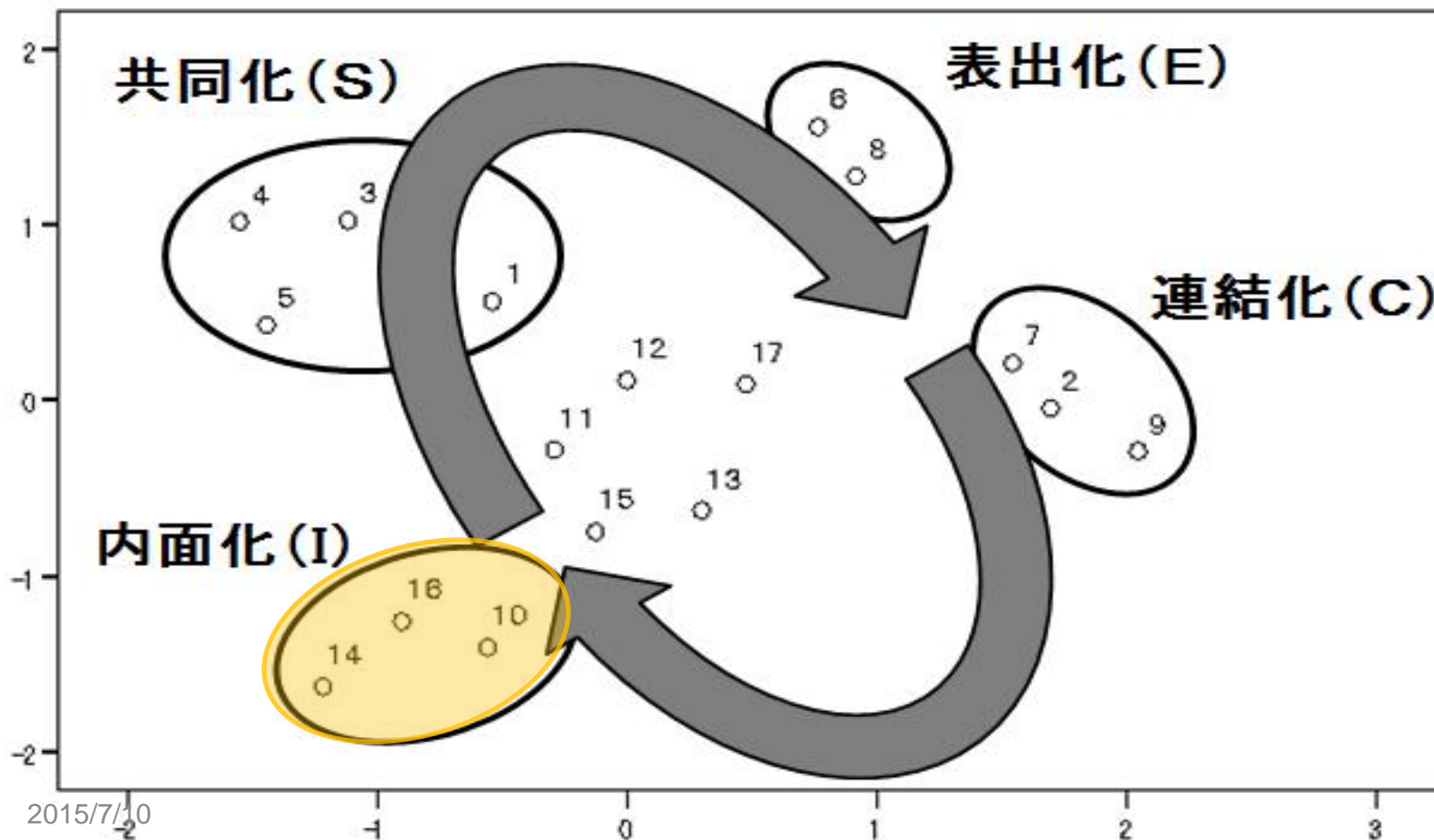
# (3)「連結化」Combination 形式知の高度化

- 2 「自己病名」を決めよう！
- 7 「考える」ことの回復
- 9 主観・反転・“非”常識

要素から体系へ  
先行研究との比較

# 図3 多次元尺度法(MDS)による当事者研究の理念の 布置図

(数字は表2の当事者研究の理念の番号を表す)

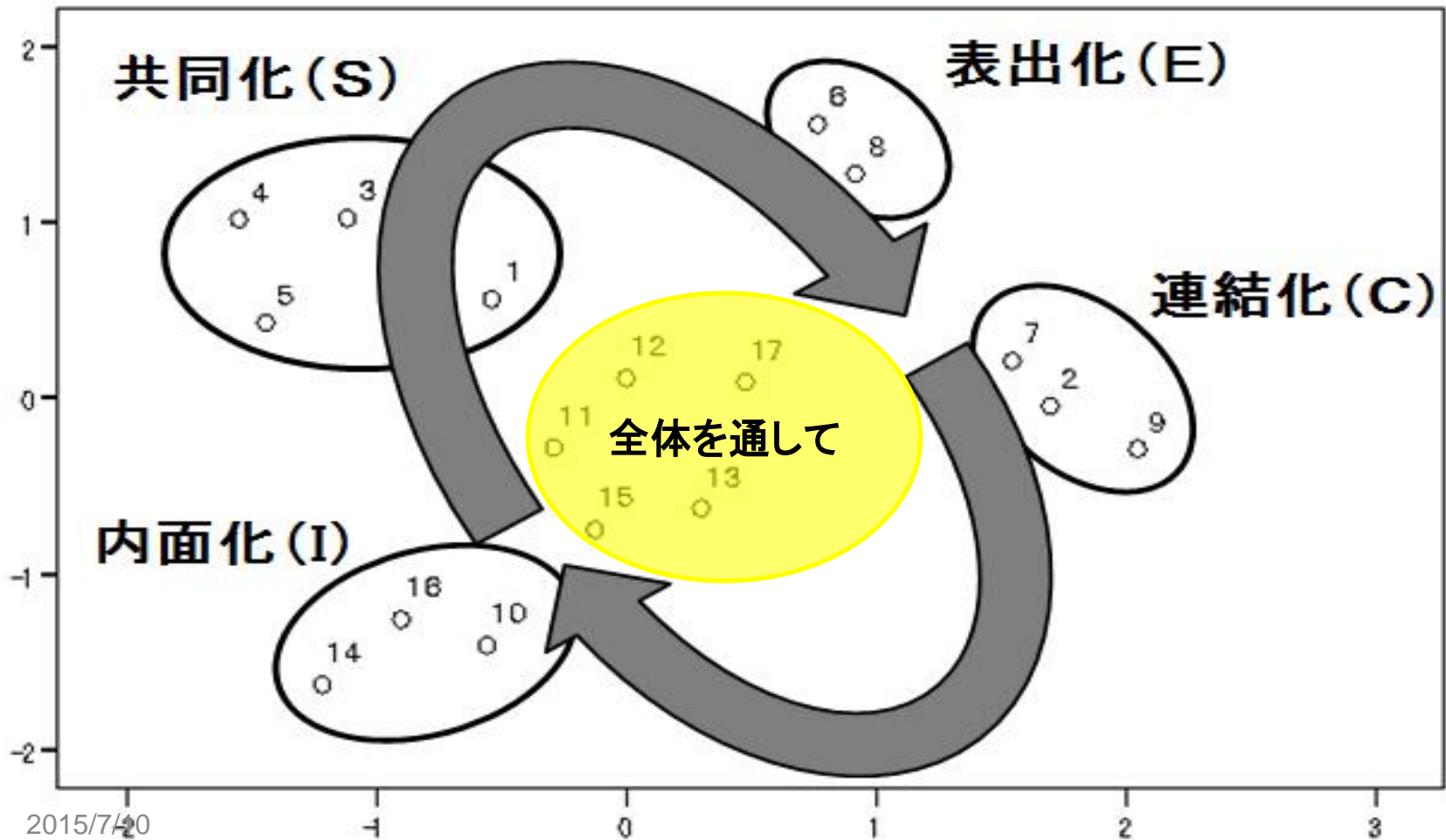


# (4)「内面化」Internalization 形式知を実験により暗黙知へ

- 10 生活の場は大切な「実験室」
- 14 「行い」を変える
- 16 当事者研究は頭でしない、足でする

生活場面での実験による検証  
さらなる改善

図3 多次元尺度法(MDS)による当事者研究の理念  
(数字は表2の当事者研究の理念の番号を表す)



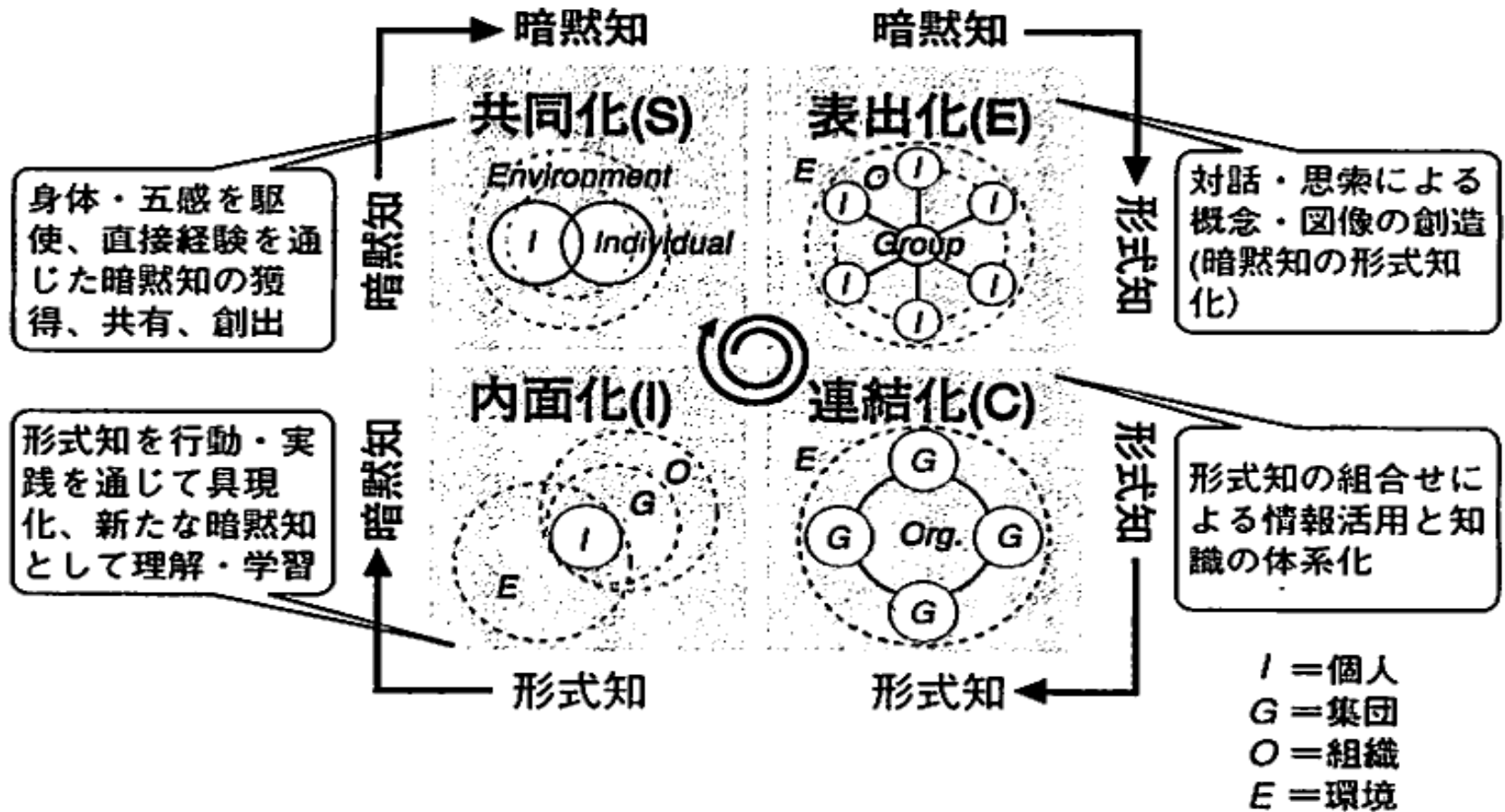


## (5)全体のサイクル

- 11 いつでも、どこでも、いつまでも
- 12 にもかかわらず笑うこと（ユーモア）
- 13 「言葉」を変える
- 15 病気も回復を求めている
- 17 これからも新しい理念が付け加わる

# 図2 SECI(セキ)モデル: 組織的知識創造モデル

自己と他者/環境との相互作用を通じた自己実現プロセス



- 國領二郎・野中郁次郎・片岡雅憲 (2003) 『ネットワーク社会の知識経営』 NTT出版

# 当事者研究における4Cと3H

- 建設的 (Constructive)
  - 協同的 (Collective)
  - 具体的 (Concrete)
  - 創造的 (Creative)
- +
- 思いやり有る雰囲気 (Humane)
  - ユーモアのある議論 (Humorous)
  - 場当たりの展開 (Happening)

## ハプニングの意義 (1983「家族の表象」)

孤立した家族は、また、「ハプニング」が乏しいとすることができる。

われわれの上には日々、宇宙線のように偶発事が降り注いでいる。それはわれわれの哀歓のみなもとの大きな部分を占めている。偶発事の活用によって、家族は豊かになり、変貌する。そもそも家庭の話題は偶発性によってはずむのではないか。そして家族が永遠に不変のものでなく、新しい人を、新しい事態を迎え入れ、古い人を見送り、古い事態を捨て去るからには、その契機としても、いっそうこのことがなくてはならない。

私はかつて統合失調症経過後の人生の軌跡を辿ってみたことがあった。すると約一〇年くらいまでは精神医学の教えるところからそうへだたっていなかったが、それを過ぎると、全く事情は変って、よき友人にめぐり合うとか、よき配偶者を得るとか、母親が亡くなるとか、良し悪しはともかく、偶然としか言いようのないものをどうつかまえ生かすかによって人生の軌跡が決まるといってもよいくらいであった。かつての精神病院がとくにハプニングが乏しい場であることは従来あまり指摘されていなかったが、その精神的な「貧しさ」の大きな要因であると思われる。

ハプニングは、むろん、ありとあらゆる種類のものがありとあらゆる働き方をするのだが、その一部のものは、トリックスターの働きをして、家族の、患者を犠牲にして成り立っているホメオスターシスを破り、家族全体を新しい平衡への旅に出させる力があると私は思う。

# 中井久夫2011「つながり」の精神病理pp83-84 (1985) 「家族の臨床」

実際、われわれが仕事をしていく上で重要な助け手は午前の部でも述べましたが「ハプニング」ですね。偶発事は非常な活用性がある。そういと。神頼み・みたいに聞こえるかもしれませんが、偶発事は空から降りそそいでいる宇宙線みたいに絶えずわれわれに

降りそそいでいて、ただ気がつかないだけのことが多い。最近、精神病院のあり方についていろいろいわれてますね。格子があるとかないとか、取り払った方が良くとか。無ければ無いにこしたことはないでしょうが、時には拘束が必要な場合もある、現実には。しかしなによりも強く私か感じていることは、現在の精神病院の生活には、ハプニングが少ないということです。つまり、★驚きを伴った意外性のあるものは、われわれを生かしてくれる大きなもの★なんですね。

# 結論

- 浦河べてるの家の当事者研究は、SECI(セキ)モデルすなわち企業活動を対象とした組織的知識創造モデルによって(も)説明可能である。
- 両者は同一の構造を持つとはいえ、思いやり有る雰囲気(Humane)ユーモアのある議論(Humorous)、場当たりの展開(Happening)という3Hでの違いが仮説生成的に提案された。

# 今後の課題

- 当事者研究におけるナラティブそのものを対象とした分析

回復の語り、混沌の語り、探求の語り

フランク、A(鈴木訳)『傷ついた物語の語り手』ゆみる出版

## 当事者による研究の多様性

たとえば第3回じゃんだらにい(浜松:2011年6月18日)の研究発表との比較



## 当事者研究の定義の問題